



聲曲類纂所載

# 藝評

## ●空也念佛堂三味線會

(日本一の文樂座連)

ちんむらゐあまさまき 珍無類の尼々時 十種香の一段は唐にも日本にも無いと評判  
 された二十三季 八重姫垣は大愛嬌、可愛らしい情けいな  
 こと、で、自笑に堪へぬ。僕はモウ語らんやと言ひつゝ床から  
 一目散 廣作の寺子屋、お師匠ハン押つてゐマんで 清六  
 の合邦、風呂屋で聞いたよりは上等ですよ 三味線の津太  
 夫は大に本會のレコードを破つて大愛嬌あれが文樂の津太  
 夫ですか?……は揮つてゐる、吉兵衛と綱造は到底眞面目  
 で語りましたなア 大切の野崎村で會場の念佛堂を震動  
 させる 木原席太撥發妓袖吉姐ハンお御酒加減 竹本染  
 太夫の三味線、淨瑠璃の中止、三味線の趣意を大に發揮した染  
 太夫の大滑稽、マア、怪我がなうてお目出度……の當文

句は大に揮つた——ヤツチヨロマカセのこりわいな 湘江の  
 お師匠(染太夫)サン萬歳々々……。

中村 吟翠

◎三味線會とは名稱の如く、平素檜舞臺で三味線  
 を操縦し、女房役となつて常に、淨曲の美妙を發  
 揮しつゝある、一廉の三味線彈が、亭主役の太夫  
 資格となつて、柄にも無い音聲をホジクリ出すと  
 同時に、一方相手の女房役は即ち、一年三百六十  
 五日音聲の研究してゐる染や、津太夫なぞ堂々た  
 る太夫が、平素持附けた事のない三味線を、得意  
 然として弾くのだ。結局太夫と三味線彈きは、お  
 互に反對の位置にあつて物を演じる……と、云ふ  
 のが原則で、所謂三味線彈きの方が物が言ふから  
 三味線會と命名した譯である。而して太夫も三味  
 線彈きも、馴もせぬ研究をしてゐ無い藝當を、眞  
 白面に演じ終つたのちア面白くない、大にスカタ  
 ンを演じて滑稽の店卸し、聽衆をして抱腹絶倒、

大にお膳の轉宅をさせなくちやア、法律違反……  
イヤ音律違反として、三味線會の趣味を没却した  
ものと言つても宜い位であるのだ。

◎去る七月五日御靈文樂座の連中が、誤奇特にも  
常に信仰する新町遊廓は、有名な空也上人(田中氏  
の別宅)、銀に合した佛念堂に於て、デン／＼宗の  
三味線會を開催した。記者は開演の五時に先立つ  
て、殊勝にも球數の代りに、閻魔帳と鉛筆を携帶  
しての御參詣……イヤ本部から急使を以ての出張  
命令に、時を移さず往聽したが、遠に日本一の文  
樂黨が滑稽的の、珍會を催すだけあつて、満場立  
錐の餘地もないと云ふ素晴らしい光景、而して婉曲  
數番大に滑稽を演じて「淨瑠璃を中止するなぞの  
騒ぎは大愛嬌、殊に染太夫や津太夫の三味線と來  
たら、文樂や堀江は愚か恐らく天下絶品のね色で  
ポテン／＼／＼モチン／＼／＼……とは蓋し前代  
未聞の珍……如何な聽客も是を笑はなければ、人

間チマのお仲間ちやア無いと宣言せられた位だか  
ら、満場は笑聲續出、季節に因む朝顔といふでも  
あるまいに、さりとては祐仙式のお笑ひより  
以上で、盤城式に不粹な者は一人もなかつた。而  
も力士然たる團體の染太夫が床から落下した際に  
満場の一隅から南無阿彌陀佛々々々々々々、會  
場因むで？のお念佛を唱へたなどは面白かつた  
が随分揮つた惡戲言であるワイ……。

◎處で露拂の太功記は助八といふ、相當に鳴す若  
手の三味線弾きであつたが、唸る方と來たらカラ  
ものにならぬ。重次郎や初菊が踊り出しさふで、  
老婆の節義も苦しい、操のクドキに當られて、仁  
丹が欲しくなつて來たとは、珍無類の尼ヶ崎であつ  
た。三味線は誰だか分らなかつたが、御兩人とも  
横町の味噌屋を大に困らせたさうだ。

□お次は矢張御簾内での十種香、行水の流れと  
……出演者の咽喉は薩張分らないものだ。泣音に

袖も濡衣が今日、命日を吊ひの位牌に向ふての一條——『廣い世界に誰あつて、おまへの忌日命日を吊ふ人も情ない』などと、新内節の出来損いを聞かされた、情なさは濡衣ばかりぢやアない。『月にも花にも樂みは』まだ／＼早計だよ。『畫には書せばせぬものを』は寫眞に採つて置きたかつた。『泣涕、が、い、泣、さ、給、へ、ば』と來たら堪つたもんぢやアない、ポロイもぼろい涙ぼろうて堪らないから太夫サン大に笑ひつゝ、床から飛降て一目散——入替つて陰出した太夫サンも御同様に大愛嬌。『又立戻つて、畫姿に』などと大詰り、手を合せ云々で滑稽の種蒔き、夫から八重垣姫が濡を介して戀愛主義を發揮するの一條、『可愛らしい情かいのと』で大に漬物屋を困らせたのみならず、太夫センセイ自笑に堪られないものだから、法性の兜を脱いでの大降參、僕はモウ廢るワ……何しても語れないワ……と言ひつゝ、床を引下つたなぞは揮つ

たものだ、但し唐にも日本にも無いと評判された程の二十三孝、前者は助八、後者が兵三で、女房役の三味線は捨三であつたそらな。

市彌の櫻丸切腹は案外眞白面であつたが、語物に因むで大に苦しい如であつた。三味線は前席に於て、二十三孝を陰つて笑はせた助八、タン、聽客に視線を引かれての果報者……。

兵三の『尼ヶ崎』奥——光秀が操の方を叱責するの條から語出したは頗る奇抜だ。『妹脊の別れ愛着の』で、烏渡男前をあげた。以下の語口はヤマコの的大車輪が大喝采であつた。

次は野澤吉兵衛で、越路太夫の相三味線だけに大歡迎、語物は踏掛村であつたが、流石は越路相手の人だけに、旨味ものだ、但し舞臺は小さいが、品の佳いことは無類飛切であらう。而して此一段を始終眞白面に語つたは、エライもので、三味線彈の淨瑠璃としては蓋し、名亭に因む上々吉

の部であつた。大喝采……。

□入替つて出演したのが、髯武者の號ある豊澤廣作センセイ、流石は當廓の義太夫藝妓に薰陶しつゝあるだけに、お師匠サンく〜で大歡迎された迄は宜かつたが、語物の菅四を源藏戻りから唸出しての大滑稽、剩さへ此人は張子の虎の如に時折り小頸を振る癖のあるに、さりさては又扇子を頻に叩きつゝ、御自分から間拍子とつての語振には、三味線彈の某も大に脂をとられてゐた如だ、まかも寺子檢めの一條、子供呼出しの間に於ける扇拍子の度數と來ては、餅搗をつくりだ。お剩に語る節廻しが流行したラツパ節類の如であつたから、聴客は大に噴出した、廣作センセイもクツく〜笑ふた、その効能や忽ち鎗一番。ヤールお師匠ハン揮つておマンで……と、別嬪から參られたなぞは揮つたもんだ。然して其子供檢閱の區切りから直に、段切のいろはネクリに飛附いて、御臺

若君諸共に「ナンカンと糞度胸を据て語つたなどは正氣の沙汰ぢやあるまい」と言ふ評判もあつた。是が日本一の文樂座に於ける竹本染太夫の相三味線、豊澤廣作センセイの出演した、スカ原へンテコ屋の一段、とても二度とは聴聞の出來ぬ有難い淨瑠璃であつたから大喝采……。

□鶴澤綱造の長局は至極眞白面で毫も失態を演じない、のみならず始終優美に語つて、曲中の人物を活躍させたは流石の綱造である。「跡見送つて襖の蔭」云々の地合からシツクリと語出し、節尻が綺麗で詞も美しい。お初の可憐尾上の優美、舞臺は小さいが、人形を眼前に觀せた如な語口であつた。尾上が内に煩ふ思惑と、表に惱む様子ぶりなぞ申分なく、主思ひのお初が尾上を慰むる芝居断しの條もダレず、お初が「イヤほんに私としたことが危相な、鹽谷殿に親御はありませぬもの」と、早速に言直す言葉の氣轉は段中の出色。文使

の條も言葉の外に佳く情を寫した。尾上の愁歎に移つては一層の語榮にであつた。今別れたが一生の別れ、とは知らずして、嘸やとつかは戻つて來て、歎かんことの不便やと』から『アノ文をごらうじたら、何と身も世もあらうぞ、つねに氣細なかい様の、其場で直に死なしやんしよ』の邊は悲痛胸に迫つて、聴衆も大にハンカチを絞つたのである。要するに此一段は好成績、音色と音聲と兩方の研究を重ねつゝある、文樂座將來有望の青年であらう。拍手百雷の如き大喝采であつた。

△絲の野澤一彌も神妙に勤めた。(まだある)

● 駄々評 田の字

先月八日夜、緒方病院の大廣間で、例の會があつた。幸に參聽の榮を得たから、駄々評を捏ねること左の如し。

一 阿波鳴戸

絲 ○仙 ○龍

はりぢゆうねの 播重の姐さん、聲も節廻しも無難であつたが、おゆみ おやこ 弓、親子の切ない刹那が、少々だれ氣味は惜しかつた。男ならぬこそ……。

二 合邦辻

堀内花童 絲 猿 絲

お聲の優しい所から何となく品のよい語り振りで例の匙以外のお手際感じ入つたり。……休聲の爲でもあらうか、傍の婦人連曰く、先生ゑらう落ちやりましたナア。

三 菅原寺子屋

絲 澁谷香坡 同 上

一口に云ふと、澁谷翁の澁い淨瑠璃である。中々老練の所が多い。……病後の松王はチト苦しかつた。

四 赤垣出立

絲 千草紫紅 同 上

聲達者に何の苦もなう、すら／＼と語られたはた

高、了竹なりや七夕ならぬ天川屋儀兵衛をたのみ  
参せ候、たとへ巖坂城内のいこじ者があらうとも  
必す、御見捨なう、二世も三世も幾千世も、そ  
ひとげ度存じ参せ候かしく。

かへすくも、九大夫く、御前のことのみ思  
ひつめ、たゞ此頃は定九郎く、に、命さへ短き  
夏の與一兵衛、あはれの者と思召ば、鐵砲で御  
返事を少しも早野勘平と、おかるが樂み参せ候  
かしく、

手を出して足をつくべきふみなれば

すひつたこの御返事ぞまつ

越賀元太郎

うそ月けふ

小夜衣さま

●粹士に御禮 發記人○○粹士様よ、去月十七  
日夜は某紅點を會員に御勧誘の段難有儀が本會を  
代表して御禮申上候

(めがね生)

### ●語呂合發表

○來月十日發行の第四號に發表いたします。

### 藝評

#### ●空也念佛堂の三味線會 (つゝき)

□次は三味線界に健腕の聞のある鶴澤清六の  
「合邦内の場」女房役たる相三味線が三代目の津太  
夫と、いふ役割で聽客は鶴首期待しつゝあつた  
清六の淨瑠璃は鼻先聲で少しも應へぬ、湯屋の三  
助が鼻唄宜しくと感動を與へた。如何な清六でも  
語る方は零である、其譬多數の素人に教導して、  
随分名人を出す人だが、さて御自分が太夫資格と  
なつての語口と來たら、寧ろ滑稽の種蒔である。  
傍人曰く、君それでも湯屋で聞いたよりは少し上  
等ですよ、は揮つてゐる批評ぢやないか。而して  
茲に特筆すべきは津太夫の三味線である。先づ三

味線の持方から撥の使ひ方、糸を操縦する按排つたら、全然なつて居ない。お刺に弾詰つてツボも糸道も解らぬ儘の弾倒しで、脱線も絲瓜もない。

高い山もあれば紀伊の國もある。それでも津太セシ、掛聲を間断なく發しての無茶苦茶弾には清六太夫も往生仕まつたものか、大に笑出したものだから、津太も到々噴出した。満場は素より始終笑聲断えずの抱腹絶倒で、大に三味線のレコードを破つた竹本津太夫の大愛嬌。語る方は豪の者だが倍、三味線と來たら播重の前語り程も弾けない音色のよしあし處か、音締と撥のいしり如を拜見したばかりでも情けなくなる、而もトツチンカン

いといふ取沙汰であつた。モシ、あれが文樂座の津太夫だすと、お婆サンの質問が揮つてゐる。◎大切は野崎村の總掛合で、會場の念佛堂を震動させた珍無類の三味線會であつた。先づズラリ床に陳列された太夫三味線に對して、木原席の袖吉といふ婆藝者が、お神酒加減の大言壯語に、何れの出演者も大弱り、袖クン益々興に乗じて満場を賑はした、殊に染太夫などは大に冷評されて呆然たるばかりであつた。閑話休題吉兵衛のお染は紅一點の出來にて何處迄も可憐。網造の久松と相俟て宜い夫婦だ、何れも品佳く語つたは結構。清六のおみつは亡なつた細君に、愔氣された經驗があるから、悪からう筈がないと云ふ批評があつた。廣作の久作は何處迄も罪がない、例の灸點一條、「アツ、く、ゑらいぞく、あすが日死うと火葬は止にして貰ひませう、丈夫に見てもモウ古家屋根も根太もコッヤ一時に割普請ちや、アツ、

……三云々の間に例の扇叩きの激しさ、野崎村に餅搗は無い筈だが此の、久作は灸を据わつゝ、餅屋の開業を頻りにゴ吹聴に及んだなぞ、随分珍妙な久作であつたから、満場は大噴出し、さりさては面白い久作であつたワイ。

而して亦茲に特筆すべきは、此一段を彈受けた。

○染太夫の三味線にツレ彈の津太夫

である。前者の染太夫は既記、前席に於ける津太夫以上の大滑稽を演じて、多くの聴客より賞賛の光榮を荷ふた果報者、染クン大兵肥満な體軀を床に陳列された處は、備前名物の南瓜宜しくといつた態度で、彈けもせぬ三味線を抱わつて、調子はモウ合はしてあるか？」と言いつゝ、眞白面腐つて開始めたのからが、滑稽を演出した抑々である胃頭から「振の肌着に玉の汗、迄は、何やら斯やら盲目滅法に彈いたが、後は薩張ものにならぬ、仕舞の無茶苦茶彈である。脱線するやら調子が解らぬ

如になつて、根縮を見て貰ふやら、變な掛聲を出して相手の太夫をクツク笑はせるやら、種々の狂態に満場は大噴出し、笑聲湧出して、殆んど底止するを知らなかつた折から、ツレの津太夫が出て来た、前席に於て大に種蒔がしてあるものだから、聴衆は津太夫の顔を觀詰つゝ、鯨波をつくつてキヤア／＼／＼笑ひ出した、津太も御同様に噴出しつゝ、床に登らむとする。一方の染太夫は少し席を譲つて、津太を登壇させむとするの一刹那、何した機が染クン三味線を抱わした儘床からドスンと落つこられた。サアカボチア式の御本尊が素張らしい音響と共に仰向けに墜落したものだから、淨瑠璃を中止して、總掛りで漸々元の床へ安着させた、と云ふ騒ぎの大滑稽を演じたなどは、但し神武以來の珍滑稽だらうと云ふので、會場は震動する程の笑聲であつた。流石に文樂座の太夫、日本一の染と云はる、だけに、三味線會の趣味を遺憾なく



のお師匠はんも揮つてゐるマンでは否か上に揮つて  
る婆藝者の冷評であつた。  
(吟翠子稿)



曲藝類纂所載

### 藝死時報

#### ●故桐竹紋十郎

文樂座の人形遣ひ桐竹紋十郎こと小林福太郎は豫  
て腸を病みて去る六月下旬より京都大和大路三條  
下る高樹院方に出養生し同町の醫師大友金一氏の  
治療を受けゐたるに去月十二日より病俄に革まり  
伴嵐和三郎、同じく三左衛門、娘とく、和三郎  
の母小林ふくおよび關係深き大阪北新地の小西こ

發揮したは無邪氣であると褒ねばなるまい。而して是に對する廣作や、清六の惡洒落が面白い。曰く、「觀音様の御利益で、お染も久松も、ママ怪我の無いは仕合せ」などと、淨瑠璃文句を的込むのでオチが頗る揮つてゐるでないか。染センセイ何十年と勤むる文樂座に於ても、嘗て怪我過失の無いに、是は又意外の災難で觀音様もよもや御存知あるまい。然し餘程精進が宜かつた故で、病院行きの怪我もなかつたは何より結構であつた。淨瑠璃半で斯いふ大滑稽を演じた野崎村は、前代未聞の珍であらう。先づ染太夫が本會第一の優等で、津太夫が第二等で二人ながら揃ひも揃ふた、三味線のレコード破りで、本會も大に盛であつた。  
右終つて例の袖吉が、ヤツチヨロマカセで踊出した、堀江のお師匠(染)はん、お目出度マンなど冷評一番、……イヨー大當りくくく、とは染太夫と津太夫のテレ隠し。堀江も江戸堀(津太夫)

ま其の他數名のものども附き切りて看護中十四日の夜十時頃より危篤となり大友醫師手當を施したるもその甲斐なく十五日の午前四時三十分安々と永眠したり病名は直腸癌兼慢性膀胱加答兒なり死去の前日十四日の夕仰向に寝ねつ、平生の如く舞臺の事許りを口にし二十四孝の八重垣姫を細き掛け聲して怪しき手振に足拍子取り夢中に人形を遣ふが如き身振りをなしたり倅和三郎遺言は無きやと尋ねしに何も無し唯舞臺を勵めとの一言、程なく人事不省に陥り遂に曉告ぐる鐘の音に先だち六十四歳を二期として此世を去りしなり。紋十郎は弘化二年南區上本町空堀邊に生れ人形遣初代桐竹門十郎の子なり、父は紋十郎を人形遣にしたくなしとて九歳の時砂糖屋に丁稚奉公させしが三日も勤まらず續いて下駄屋、乾物屋などへ遣りたれど何れも四五日とは勤まらねば到底モノにならぬとて其の後は父の許にあり父門十郎が中形

の人形を拵へて交樂座に貸しゐたるより其使ひにて絶えず交樂座に入出入りたり、交樂座はその頃西横堀の御池橋詰にありたり紋十郎その時より人形遣の志を起し、が懸て父死してより人形遣初代吉田辰造の世話にて交樂座の近所なりし新内祭文の寄席能勢山席に出勤し初めて朝顔日記大井川の深雪の足を遣ひしに話にならぬ拙さなりとて一度で断られ其後は腰元などを遣ひて辰造の弟子となり辰三郎または辰吉などと稱しゐたり、交樂座博勞町の稻荷社内に移りし時父の名を取りて桐竹龜松と名乗り先代萩の松前鐵之助を遣ひしとて頭取の二代目吉田玉治より物にならぬとて二日目から役を取上げられたり、奮發の氣一時に起り懐中の僅十六文を頼りに東京へ上り先代西川伊三郎の許に身を寄せ此時初めて桐竹紋十郎と名乗り各地方を巡業する中一心不亂の修業の功現れ立派な女形遣ひとなりて歸阪したりその頃交樂座は稻

荷より松島へ移りゐたるが一座に加はりて越路太夫(今の攝津大椽)につき合ひ板額を遣ひしを初めにそれよりは始終文樂座に加はり遂に日本一の名人と謳はるゝに至りぬ、然るに西五箇月前より大腸露出の病起り日頃劇輕な男も俄に眞面目臭くなりて病は唯だ重くなるばかりなりしが去る四月興行に前狂言に釋迦如來誕生會、次狂言に阿古屋琴責めが出て阿古屋の役を勤むる事となりし時、病身のため引退したき考へありしも同座が松竹會社の手に移りて間もなき頃なればとて強て勤めたりこの時より餘命の長からぬを覺悟し型を後世に残したしとて特に三貫目も重き人形を新調して遣ひしが幾度も倒れかゝるより一座のものより休場を勧めたれど今度は舞臺で倒れるとて一日も休まず到頭勤め了せたり次に六月興行は十二日初日にて前狂言の箱根靈驗燈の仇討に初花を、中狂言の古手屋八郎兵衛にお妻を勤める事となりしが病よほ

ど重かりしゆゑ伴三左衛門に胴を遣はせ己れは後で左だけ遣ひゐる中二十七日には最早堪へ難くなりて彼を俥に譲りそれより床に就きたりしなり、その折大腸は崩れて下腹は小山の如くなり容體甚だ悪きより二十九日京都へ行き大學病院の診察を受くると老人ゆゑ切開手術なし難し暫く加養して身體を丈夫にし其の上の事にせんと云はれしかば其のまゝ同地にて靜養しゐたるに暫く経ちて大腸の崩れも治りたりさればこの向きなら未だ死ぬと本人も云ひゐたりしものを俄に革りてこの世を去りしは眞に惜むべきの至りなり。

### ◎大椽ご紋十郎

前記紋十郎死亡につき大椽曰く私は紋十郎が明治九年に東京から大阪に歸つて來て當時龜松と名乗り文樂座が未だ松島に在つた時分から今日まで三十四五年間といふ永い間一緒に打つて來ました